九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王昭君の故郷帰州で詠んだ白居易の「青塚」詩

竹村, 則行
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/4763184

出版情報：中国文学論集. 50, pp.60-68, 2021-12-24. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

王昭君の故郷帰州で詠んだ白居易の「青塚」詩

竹村則行

一　はじめに

白居易（七七二―八四六）は元和十四年（八一九、四十八歳）、三年間の江州司馬任務を終え、長江三峡を溯上して忠州刺史に栄転する途中、王昭君の故郷帰州興山を訪問し、「青塚」（〇一二二）、「過昭君村」（〇五二六）等の詩を詠む。[1] ところが興山には王昭君に因む昭君（明妃）廟の記録はあっても、墳墓「青塚」の記録は無い。では、詩題の「青塚」の由来は何か。小文は、白居易が当該詩を「青塚」と題して諷諭詩を詠んだ経緯について、李白や杜甫詩、更に敦煌「王昭君変文」等を参照しつつ、従来説を再検討する。更に加えて、五十一年前の七六八年、夔州から江陵に向かって流浪中の晩年の杜甫（五十七歳）が同地で詠んだとする「詠懐古跡五首其三」（王昭君）詩を取り上げ、両者の当時の立場や環境、王昭君描写の差異について比較し、両者の詩人としての質的な差違についても言及したい。[2]

二　白居易が帰州で詠んだ「過昭君村」と「青塚」詩

以下、当該の白居易の両詩について、紙幅の関係もあり、原詩（常用漢字）と大意、簡評を簡単に示す。[3]

過昭君村（〇五二六）

霊珠産無種　彩雲出無根　亦如彼姝子　生此遐陋村　至霊物難掩　遽選入君門　独美衆所嫉

終棄於塞垣　唯此希代色　豈無一顧恩　事排勢須去　不得由至尊　白黒既可変　丹青何足論
竟埋代北骨　不返巴東魂」　惨澹晩雲水　依俙旧郷園　妍姿化已久　但有村名存　村中有遺老
指点為我言　不取往者戒　恐貽来者冤　至今村女面　焼灼成瘢痕

（大意）美玉や彩雲が何もない処から生じるように、美女王昭君はこの僻村に生まれた。美貌は隠し難く、彼女は選ばれて宮中に入ったが、他の宮女に妬まれ、最後は辺塞に棄てられた。彼女ほどの美女は天子が一見すれば即寵愛されたはずだが、障害が天子によって除かれず、正邪が逆転した宮中に於いて、賄賂を拒んだ為に醜く描かれた彼女の絵姿が天子に届けられた。結果彼女は匈奴の王妃に選ばれ、北の異国に骨を埋めることになり、その霊魂が帰郷することは竟に無かった。」暮れなずむ帰州の雲や川は王昭君の頃の郷里のよう。彼女が没して久しいが、昭君村という名は今もある。古老が村の娘を指して言う、「昔の事から教訓を得ないと、将来冤罪を招きます。それで村の娘は宮女に選ばれないように今も顔を傷付けているのです」と。

（簡評）詩題の「昭君村」や詩中の「但有村名存」は杜甫「詠懐古跡」其三（王昭君）の「生長明妃尚有村」を思わせる（後述）。白居易詩は、王昭君の略伝を述べる前半と昭君村の現状を詠む後半に分かれる（」で示す）。「惨澹晩雲水」は白居易の実見した昭君村の夕景であり、同時に白居易の現地宿泊を示す（杜甫詩も同じ）。古老の話では、村の娘は王昭君故事を教訓に、宮女に選ばれないよう、今も自ら顔を傷付けるという。

青塚（〇一二二）

上有飢鷹号　下有枯蓬走　茫茫辺雪裏　一掬沙培塿　伝是昭君墓　埋閉蛾眉久　凝脂化為泥
鉛黛復何有　唯有陰怨気　時生墳左右　鬱鬱如苦霧　不随骨銷朽」　婦人無他才　栄枯繫妍否
何乃明妃命　独懸画工手　丹青一詿誤　白黒相紛糾　遂使君眼中　西施作嫫母　同儕傾寵幸
異類為配偶　禍福安可知　美顔不如醜」　何言一時事　可戒千年後　特報後来姝　不須倚眉首
無辞挿荊釵　嫁作貧家婦　不見青塚上　行人為澆酒

（大意）空に鷹が鳴き、地に蓬が転がる遥かな辺境の雪景中に小さな盛土がある。埋葬久しい王昭君の墓という。そ

の美肌は泥土となって化粧の面影も無いが、彼女の怨みは消えず、今も鬱然たる霧となって墓から湧き出し、骨と共に朽ちることはない。」婦人の栄枯は何より美醜によるが、美女王昭君の運命が一絵師に握られたとは。時に宮中では正邪が混乱し、賄賂を拒んだ昭君の絵姿が醜く描かれて天子の眼を欺き、美女を醜女に誤認させ、王昭君を異族の妃に遣ってしまった。美女が醜女に及ばないとは、美女の災難を誰が知ろう。」これは当時だけの話ではなく、千年後の今日の教訓でもある。特に将来の宮女候補たる村の娘よ、見かけの美貌に頼らず、荊の釵を挿して貧家に嫁ぐことを厭わないことだ。ごらん、青塚の傍で旅人が昭君墓に神酒を澆いでいる（あなたもあの様にならないように）。

（簡評）詩意を三段に分ける〔一印〕。序盤は青塚の風景である。荒涼とした辺境の雪景中にある青塚から、今も彼女の怨念が湧き出ている。鷹や蓬、雪景の設定は白居易の想像か。今も彼女の怨みが消えないという表現も通常の「昭君怨」の表現を脱しない。中盤は彼女ほどの美女が醜女とされた不運の事情を述べる。「白黒」「丹青」は前詩と同じ詩語である。終盤も前詩同様、王昭君を例にした今の村の若い娘への説教である。最終二句は、王昭君の故事から教訓を得ないと同じ轍を踏む事になると村の娘に忠告する。二年前に白居易が江州で詠んだ「昭君怨」（一〇〇三）もこの二詩と同様の内容を詠み、「自ら是れ君恩薄きこと紙の如し　一向に丹青（絵姿）を恨むを須ひず」と結ぶ（後述）。我が美貌に頼り過ぎた王昭君、正邪の判断を誤った天子の双方を指弾する。特に、賄賂を拒否した結果異郷に遣られた王昭君と、宮中の不正を正そうとして逆に江州へ貶謫された白居易の正義と貶謫の共通認識を、白居易の二詩は「白黒」「丹青」の詩語を用いて巧みに描写する。白居易が「青塚」を諷諭詩に分類する所以であろう。

三　李白と杜甫の「青塚」詩

紀元前一世紀頃に没した王昭君の墓を「青塚」と呼ぶ例は意外に新しい。先行研究[4]によると、最初の使用例は不詳だが、以下に挙げる盛唐の李白や杜甫詩の用例はかなり早期であり、白居易時には一般化していたと思われる。

① 李白「死留**青冢**使人嗟」（死して青冢を留め、人をして嗟かしむ）（「王昭君」二首其二）

② 杜甫「独留**青冢**向黄昏」（独り青冢を留めて、黄昏に向かはんとす）（「詠懐古跡五首」其三）

李白（七〇一―六二）と杜甫（七一二―七〇）は、天宝四載（七四五）、共に河南・山東を遊び回った仲であり、中唐の白居易（七七二―八四六）は、この盛唐の詩仙・詩聖に対して、格別の敬意を払っている。それは例えば元和十年（八一五）、江州貶謫途次に詠んだ「李杜の詩集を読み、由りて巻後に題す」（『白氏文集』巻十五、〇九〇〇）に明らかである。だとすれば、白居易の「青冢」題の直接由来として、直前の盛唐時代に既に著名であった、李白や杜甫詩にも見える「青冢」を想定するのも、あながち無理な付会ではあるまい。

③ ここでは更に敦煌「王昭君変文」の「青塚」について検討する。既に注（4）に挙げた先行研究が指摘するように、「王昭君変文」には注目すべき「青塚」表現が重出する。

墳高数尺、号**青塚**。～八百余年、墳今上（尚）在。～望其**青塚**、～**青塚**寂遼（寥）～

ここに述べる「八百余年」が実数に近いとすれば、王昭君の没年（紀元前一世紀頃）とぴたり符合し、その他盛唐詩人の「青塚」語使用も含め、李白や杜甫の盛唐時における「青塚」語の流行を物語る。李白や杜甫を尊崇する中唐の白居易時に於いても、「青塚」は例え本人の墳墓墓参が無くても、当時一種の流行語であったと考えられる。

④ 中唐・李遠の「王氏の帰州昭君廟を話るを聴く」詩

中唐・李遠に「王氏の帰州昭君廟を話るを聴く」詩がある（『全唐詩』巻五一九所収）。李遠は太和五年（八三一）の進士、即ち白居易と同時代人である。原詩の引用は省くが、白居易の時代に帰州に昭君廟が建立されていた記録に注目したい。このことは、白居易が帰州昭君村を訪問した八一九年に同村に昭君廟があったことを意味する。更には長期の信仰対象たる祠廟の性質上、杜甫が訪問した五十一年前の昭君廟の存在も想定できるであろう。

但し、昭君廟の存在と「青塚」とは同等でない。杜甫「詠懐古跡」其三（王昭君）（後述）を見ても、昭君廟に祭主たる昭君像（画）を祀ることは成都の諸葛孔明廟の例からも無理なく想定できるが、王昭君廟に「青塚墓」や「青塚図」を設置することは馴染まないし、前例を聞かない。では白居易の「青塚」題の由来は何か。これまで述べ来たったことからすれば、白居易が沙漠にあるとされる青塚を訪問した可能性は無く、冒頭の「飢鷹・枯蓬・辺雪・培塿」

等の表現は白居易の想像によるものであろう。そして詩題を「青塚」とした所以は、尊崇する李白・杜甫を始め、盛唐中唐時代に一種の流行語であった用語を諷諭詩の詩題に冠したと考えるのがより妥当ではあるまいか。

次節において、白居易がこの詩を諷諭詩として設定した意味について検討したい。

四　諷諭詩としての白居易「青塚」

白居易は「青塚」を諷諭詩に分類する。[5] 諷諭詩は、白居易が『詩経』の詩人に倣い、「凡そ適ふ所感ずる所の、美刺興比に関する者（作品）…」（『白氏文集』巻二十八、「与元九書」一四八六）を纏めたものであるが、その中心は社会の諸事象に関する諫官としての諷刺であろう。白居易「青塚」詩の諷刺内容について考える際に、第二章に挙げた「青塚」（〇一二二）、「過昭君村」（〇五二六）に加え、更に元和十二年（八一七）、江州貶謫時に詠んだ「昭君怨」（一〇〇三）を併せて考察する必要がある。前例に倣い、原詩・大意・簡評を以下に示す。

昭君怨（一〇〇三）

明妃風貌最娉婷　合在椒房応四星　只得当年備宮掖　何曾専夜奉幃屏
見疎従道迷図画　知屈那教配虜庭　自是君恩薄如紙　不須一向恨丹青

（大意）絶世の美貌だった王昭君は宮女として天子の寵愛を受けて当然だったが、当時は宮廷に仕えるだけで、天子の夜伽に侍ることは一度も無かった。彼女が天子に疎んじられたのは醜く描かれた絵姿に天子が惑った為だというが、賢明な天子が事情の委細を承知していれば、彼女を匈奴に遣ることはなかったであろう。本来君恩は薄情なものであって、絵姿を恨んではいけない（何時天子に疎んぜられるか分からない）のだ。

（簡評）最後の二句において白居易は「君恩は本来薄情なもの」とする。これは直接には絵師への贈賄を拒否して絵姿を醜く描かれ、為に匈奴送りとなった王昭君、及びその経緯を察知できなかった天子の愚昧を諷刺すると思われる。一方、この「昭君怨」詩が貶謫先の江州で詠まれていることを併せ考えると、「君恩は薄情なもの」

とは、元和十五年の宰相暗殺事件について白居易が正義の上疏を行ったものの、天子に真意が伝わらず、却って有罪と認定されて江州送りとなった痛恨の事件を暗に指していると考えられる。

先に挙げた「過昭君村」「青塚」二詩において、白居易が村の古老の語りを借りて、当時の昭君村のお妃候補の美少女に対し、「何時君恩が疎くなるか分からない宮中生活は、そんなにバラ色ばかりではないよ」「見かけの美貌に頼らず、貧家に嫁ぐことを厭わない堅実な人生を送ることだ」と忠告するのは、正に白居易自身の苦い体験から生まれた貴重な垂訓ということができる。以上、白居易が「青塚」を「諷諭」詩に組み込む理由は、内容が類似する「過昭君村」「昭君怨」をも併せ考えれば、要点は以下のようになろうか。

宮女に憧れる美女に忠告するが、君恩はいつ疎遠になるか分からない薄情なものだ。美貌に自信があった王昭君は絵師への賄賂を拒んだ為に絵姿を醜く描かれ、結局天子に誤認されて匈奴に嫁ぐ不幸を招いた。その怨みは今も尽きないが、それは絵姿の為だけではない。未来の宮女たちよ、見かけの美貌に頼り過ぎないことだ。

五　まとめ ――帰郷絶望の杜甫と前途洋々の白居易が帰州で詠んだ王昭君詩の質的相違

白居易が帰州の昭君村を訪問する五十一年前、夔州から江陵に向かう途中の杜甫が、やはり同地を訪問している。時に杜甫五十七歳、成都の厳武や夔州の柏茂琳の支援が不幸にも当人の急死によって急遽中断し、新たな支援者を求めて江陵に向かう途中であった。[6] ここでは、白居易詩の王昭君描写との質的な違いを示すために、杜甫の「詠懐古跡五首其三（王昭君）」について比較検討する。当該杜甫詩の原詩と大意、簡評は次のようである。

詠懐古跡五首其三（王昭君）（〇九九五。注（6）の拙稿と一部重複する。）

群山万壑赴荊門　生長明妃尚有村　一去紫台連朔漠　独留青塚向黄昏
画図省識春風面　環珮空帰夜月魂　千載琵琶作胡語　分明怨恨曲中論

王昭君の故郷帰州で詠んだ白居易の「青塚」詩

（大意）三峡の多数の山や谷が西陵峡の荊門山へ連なるあたり、山麓の帰州に佳人王昭君は生長し、歳月を経た今も昭君村がある。宮女に選ばれた彼女は、ひとたびこの村を去って宮廷に入ると、続いて沙漠の匈奴へ嫁ぎ、一度も帰郷しないまま異郷に没した。今は年中青草が茂るという青塚が残るだけ。眼前の昭君廟のように黄昏時であろう。（昭君廟の画像は毛延寿作と違い）春風のような美しさがはっきり分かる。彼女の霊魂が珮玉を帯びて夜の月に導かれ、空しくここに帰郷しているのだ。千年後の今日、彼女の故郷帰州では、昭君怨の琵琶の弾き語りを胡人の旅芸人が胡語で演じている（彼らも帰郷できないままだ）。（異邦人の私には言葉が聞き取れないが）異郷に嫁いで竟に帰郷を果たせなかった王昭君の怨みは、同じく故郷を離れて天涯を流浪する私には明白に理解できる。

（簡評）杜甫の王昭君詩のキーワードは異郷と帰郷である。安禄山の乱後、杜甫は帰郷の見込みもないまま長安を去り、秦州～蜀～三峡を流浪して、王昭君の故郷帰州に立ち寄る。そして現地の昭君廟に祀られていた王昭君の麗姿を実見した杜甫は、千年前に当地で生まれ、長安の宮廷に入内した後に匈奴の王妃となり、一度も帰郷せずに異郷に没した王昭君の悲劇の運命を追懐する。杜甫の思いの切実さは、自身も長安に帰郷できずに異郷で客死するかも知れない不安であった（二年後に現実となる）。それ故、杜甫は胡語で語られる琵琶曲の「昭君怨」の弾き語りが聞き取り辛くても、曲中に込められた怨情を我がものとして明白に理解したのである。

ここに挙げた杜甫の王昭君詩は、竟に帰郷すること無く異郷に没した王昭君を、同じく帰郷の見込み無く異郷を流浪する自身の境遇に重ねて詠懐する。杜甫の不安は不幸にも的中し、次の訪問地の湖南において、それまで奇しくも次々に出現して杜甫を物心共に篤く支援してくれた成都の厳武、夔州の柏茂琳に続いて支援を期待した潭州刺史韋之晋も相次いで急死する。無残にも最後の望みを絶たれた杜甫は、遂に七七九年、湖南においてその五十九年の生涯を閉じる。それは帰州訪問の二年後であるが、この王昭君詩には、通常観光の感懐詩でなく、彼女の不幸な歴史に自らの境遇を重ねて一体化した杜甫の帰郷への願望と心痛が切実に吐露されていると筆者は解したい。

一方、帰州訪問時の白居易は四十八歳、それまで三年間の江州司馬任務を終え、量移によって晴れて忠州刺史として栄転する途中である。江州は確かに長安からは遠いが、実は仏教の聖地廬山に近く、また長江中流の重要な貿

易港であり、白居易自身も一方で廬山の仏僧との交流を楽しんでいる。更に忠州刺史後の彼の履歴は、果たして三年後には尚書司門員外郎として晴れて長安に帰任している。その白居易が帰州で訪問した王昭君古跡（恐らく王昭君廟）は、白居易にとっては、所詮古代の不幸な履歴を持つ地方の一宮女の遺跡に過ぎない。無論、「君恩など薄情なものだ」という述懐には、三年前の白居易自身の苦い体験が加味されてはいるが、それも今は過去となり、白居易は村の娘に「王昭君のようにあまり自分の美貌を過信しないことだ」との、揶揄めいた忠告を発する。ここには、杜甫とは違い、王昭君を自分とは遠く離れた古代の一地方美人として客観視する白居易の冷静な観点がある。

このことは、実は王昭君に限らず、悲劇に遭遇して社会の底辺で辛苦する人々を詠んだ所謂社会詩全体についても、例えば杜甫の「三吏三別」詩や白居易の諷諭（新楽府）詩（「青塚」を含む）を想起しても基本的に同様である。則ち、杜甫の社会詩は描写する対象に自らが親近肉迫し、又は一体化して描写するのに対し、白居易の社会諷諭詩（新楽府）は辛苦する対象に対して確かに深く同情はするものの、白居易自身は一線を隔してそれ以上は対象に入り込まない。双方とも『詩経』詩人を標榜する唐代の代表的詩人であるが、この差違は一体どこから来るのか。論述する紙幅の余裕は無いが、結論を言えば、それは、安禄山の乱後、失職して長安を後にし、中国西北部を流浪して正に辛酸の渦中にある浪人杜甫と、貶謫は経験しても、諫官左拾遺を自己の本務と弁え、社会批判と長安復帰が国家によって保証されている白居易との、当時の立場環境の雲泥の差に起因することは否定できないであろう。固より、憂苦を常態とする杜甫と、文字通り常に楽天的な白居易の人格の相違がその根底にあるのは言うまでもない。

注

（1）四桁番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』による。杜甫の王昭君詩（注6、後述）と共に、両者とも帰州上陸訪問を明記しないが、拙論は、描写内容の具体性から、両者とも帰州に立ち寄ったとして論述する。この他、「題峽中石上詩」（『白氏文集』一一〇八）の「昭君村柳翠於眉」も同時期の作品である。

（2）白居易十七歳時、科挙受験の習作と思われる「王昭君二首」（〇八〇五－〇六）は技巧が勝り、他三作とは詩作の環境

背景が異なる。故に小稿では考察の対象としない。

（3）『白氏文集』（岡村繁、『新釈漢文大系』第二下冊（二〇〇七年七月）、及び第一冊（二〇一九年五月）、明治書院）参照。

（4）張文徳『王昭君故事的伝承与嬗変』（学林出版社、二〇〇八年十二月）、赤井益久「唐詩に見える『青冢』をめぐって」（『國學院雑誌』八六－一一、一九八五年）。

（5）静永健『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年二月）、また同氏「白居易の諷諭詩」（『白居易研究講座Ⅱ』勉誠社、一九九三年七月）参照。

（6）拙稿「異郷と帰郷――杜甫「詠懐古跡五首」其三（王昭君）の繫年と解釈――」（『中国文学論纂』、花書院、二〇二一年十一月）参照。